

シモーヌ・ヴェイユ著「根をもつこと(上)」岩波文庫、岩波書店 2010 年 2 月 16 日刊を読む

根をもつこと

1. (1) 根をもつこと、それはおそらく人間の魂のもっとも重要な欲求であると同時に、もっとも無視されている欲求である。

(2) また、もっとも定義のむずかしい欲求のひとつでもある。

(3) 人間は、過去のある種の富や未来へのある種の予感を生き生きといだいて存続する集団に、自然なかたちで参与することで、根をもつ。

(4) 自然なかたちでの参与とは、場所、出生、職業、人間関係を介しておのずと実現される参与を意味する。

(5) 人間は複数の根をもつことを欲する。

(6) 自分が自然なかたちでかかわる複数の環境を介して、道徳的・知的・霊的な生の全体性なるものをうけとりたいと欲するのである。
2. (1) ことなる環境のあいだで交わされる相互の影響は、自然につむがれる人間関係への根づきとおなじく、成長には欠かせない要因である。

(2) ただし、ある環境が外部の影響をうけいれるさいにも、その影響は即効性のある養分とみなされるのではなく、自身の生命力を活性化させるための刺戟とみなされるべきだ。

(3) さらに外的な養分をあらかじめ消化吸收したうえで、そこから活力を得るのではなければならない。

(4) なおかつ、環境を構成する個々の人間は、自分が属する環境を介してのみ外的な養分をうけとるべきである。

(5) 真にすぐれた画家が〔外的な養分の宝庫である〕美術館をおとずれるとき、自身の独創性はいっそう強められる。

(6) このことは地上のさまざまな民族や社会環境にもあてはまる。

3. (1) 軍事的征服がおこなわれるたびに根こぎが生じる。
- (2) よって、征服はほとんどつねに悪である。
- (3) 征服者がおのれの征服した国に住みついて現地の民族と混じりあい、みずから現地に根をおろす移住民となるとき、根こぎは最小限に抑えられる。
- (4) ギリシアにおけるヘレネス族、ガリアにおけるケルト族、スペインにおけるモール族の場合がそうだ。
- (5) だが、征服者がおのれの掌握した地域になじまぬまま居座るならば、服従を強いられる民族にとって、根こぎは死にいたる病となる。
- (6) 根こぎがもっとも深刻な病状を呈するにいたるのは、大量の強制移送がおこなわれたとき、あるいは現地の伝統がことごとく暴力的に廃されたときである。
- (7) たとえば、ドイツ占領下のヨーロッパやナイジェリアの湾曲部において、あるいはゴージャンやアラン・ジェルボーの言を信じるならば、フランス占領下のオセアニアにおいて生じたように。
4. たとえ軍事的征服がなされなくとも、金銭にもとづく権力や経済的な支配は、その土地柄になじまない影響をおよぼし、ついには根こぎの病をひきおこす。
5. (1) 最後に、国内の社会的な関係性も、根こぎをもたらす危険きわまりない要因となりうる。
- (2) 今日、わが国の地方には、征服はべつとして、この病を蔓延させる毒がふたつある。
- (3) ひとつは金銭だ。
- (4) 金銭はいっさいの動機を金儲けの欲望にすりかえ、それが侵蝕するいたるところでもろもろの根を破壊する。
- (5) この欲望がやすやすと他の動機をうちまかすのは、他の動機にくらべて微々たる注意力しか要求しないからだ。
- (6) じつに数字ほど明晰にして単純なものはない。

[コメント]

ドイツ占領下、祖国フランスの再建のために生き、34歳の生涯を生き抜いた若き哲学者シモーヌ・ヴェイユの遺著「根をもつこと」は、激動の時代に「よく生きる」とはどのようなことかを考える上で、具体的な示唆に富む。人生において一度はじっくりと何回か読むべき名著の一冊。

— 2014年8月25日 林 明夫記 —